

中国における日本語教科書作成¹

— 歩み・現状・課題 —

曹 大峰

要 旨

海外の日本語教育では、教科書の役割が大きい。

中国でも明(1368年)の時代から日本語教育が始まり、教科書の作成が時代とともに発展してきたが、20世紀70年代以来、中日国交正常化により日本語の学習が特に盛んになり、教材作成は主に素材補強→素材改善→素材統合の方向で進んできた。現在、さらに教材研究を通して言語学・外国語教育学・教育学など広く学際的な成果を盛り込んだ新しい日本語教材の開発が進んでいる。

本稿では筆者所属の北京日本学研究中心で実施された「中国の日本語教育における主幹科目“総合日本語(精読)”に関する総合研究」と「中国の日本語教育のための新しい教材像に関する研究」の成果を踏まえて、教育部「十一五」教材出版計画で実施中の新教材編纂のための総合シラバス研究を事例に、中国における大学専攻用日本語教科書作成の現状と課題を論述する。

【キーワード】中国の日本語教育、日本語教材、シラバス研究、現状と課題

1. はじめに

日本語教育の多様化と国際化が続く今日、学習者研究や教授法研究とともに、教科書研究もますます重要視されつつある。

2006年に実施された国際交流基金『海外日本語教育機関調査』では、日本語教育上の問題点として最も多くの機関(約4割)が回答したのは「適切な教材の不足」で、2003年の調査結果と連続して目立つ問題点となった。海外の日本語教育では、学習環境と教師構成²の状況により、教科書の役割は大きいといわれるが、「適切な」日本語教材の開発とそのための研究は、当面と今後に求められている重要な課題であろう。

本稿では、中国の日本語教材作成とその研究をめぐって、まずこれまでの歩みを簡単に振り返り、今世紀70年代以来の状況と特徴を考察し、そのうえで、最近筆者が関わった教材研究の成果を踏まえて、現在実施中の大学専攻用新教材編纂のためのシラバス作成状況と研究課題を論述する。

2. 教科書編纂の歩み

中国の日本語教育の歴史は、明の時代(1368年)に端を発するが、近代以降は清末から民国初期(1900年前後)、さらに1930年代に日本語学習の

ブームが訪れた³。この時期には多くの日本語教材が出版されていたが、最初はほとんど日本の教科書の翻訳や編訳されたものであった。その後、一部の日本人教習が自分たちの経験に基いて中国人学生のために編集したものや帰国した留学生が編集し翻訳したものもあった⁴が、1930年代以降は中国人の編集したものが多くなり、政府その他の機関でも日本語教科書の編纂が行われていた。近代科学図書館の調査(1940年)によると、当時の日本語教科書は一般学習書が32種、読本が58種、文法書が26種、会話書が29種で合計145種もあったという⁵。

このような日本語教科書編纂の状況は、第二次大戦の終結とともに大きく衰退し、1949年の新中国成立から1972年の中日国交正常化までの20数年間に中国大陸で出版された日本語教科書は、『大学日語一年級課本』(北京大学東方言語系編1959年)、『日語』(北京大学日語教研室編第1冊～第3冊1963-1964年)、『科技日語自修読本』(陳信徳編1960年)、『新編科技日語自修読本』(同1964年)、『日語会話』(周潔如編1963年)、『中日貿易会話』(金鋒編1965年)の数種だけであった。

1970年代に入ると、文化大革命で停止された大学の学生募集が復活し、北京大学をはじめ一部の大学では日本語教育が再開したが、その後まもなく中

日国交の正常化を迎え、日本語の授業を開設する大学や民間学校が急増し、日本語の教科書の編集も各大学で始まった。上海市大学教材『日語（日本語科用）』（1974-1976年）を初め、湖南大学の『基礎日語（理工科用）』（1973年）、吉林医科大学の『医用日語基礎』（1978年）、人民教育出版社の『日語（第二外語用）』（1979年）など30数種も出版され、ラジオ日本語講座も上海・北京・大連での放送開始とともに教材が出版された。

1980年代には、大学の日本語教材はさらに90種近く出版されるようになったが、上海外国語大学の『日語』（1980-1981年）をはじめ、北京大学の『基礎日語』（1981年）、復旦大学の『日語』（1983年）など日本語専攻用ばかりではなく、理工科用の日本語教材も数多く出版された。また、小学校の日本語教科書は『大連市小学使用教材 日語』（1989年）が出版され、中学と高校の日本語教科書も人民教育出版社から出版された。

1990年代には、急増する日本語教材の出版に対して、教育部推薦教材として大学の専攻用と非専攻用の日本語教科書が多種出版された⁶が、上海外国語大学の『新編日語』が日本語専攻で最も広く使用される日本語教科書のロングセラーとなった。一方、人民教育出版社と光村図書の協力で出版された『中日交流標準日本語』が、テレビ講座を通して中国全土に広がり、最も販売冊数の多いベストセラーとなった。

21世紀に入って以来、大学用と小中学校用の日本語教科書は新世紀を迎えて相次いで新版を発表したが、新しい試みを凝らされたのは大学非専攻用『新大学日語』（高等教育出版社）、大学専攻用『総合日語』（北京大学出版社）、小学校用『小学日語教材』（遼寧少年儿童出版社）、新シラバスに準拠した中学校用『義務教育課程標準実験教科書日語』（人民教育出版社）であった。

上述のように、中国の日本語教材作成は1970年以来的ここ30数年間、著しく発展してきた。その特徴と背景は次の三段階で整理することができよう。

①素材補強の段階（1970-80年代）

この時期に出版された教材はほとんど語彙や文章などの学習素材だけで編集されたものであった。国交正常化前は日本からの出版物がかなり制限されていたこともあり、素材の内容と日本語らしさの問題は教材の学習効果に大きな影響を及ぼし、教師の素

材補強能力が重要な要素となった。そのために、国交正常化の後、日本から豊富な素材を収集し教材にすることが重視され、日本の教科書の素材に魅かれて数種の編訳版も⁷出版されたが、素材補強に関心が集中していて、その内容の質や指導法には関心と研究が及ばなかった。

②素材改善の段階（1990年代以降）

中日間の交流が各分野で盛んになるにつれて、これまで出版されていた日本語教科書の問題が表面化してきた。素材内容の時代遅れ、会話文や例文にある日本語の不自然さ、文法説明の「落とし穴」⁸や応用練習の貧弱さなど指摘されていた。この時期に教育部の外国語教学指導委員会が発足し、『教学大綱』の制定と「推薦教科書」の選定により、素材や内容の改善と指導法の配慮が求められた。また、大学日本語専攻の全国学会である中国日語教学研究会では日本語教材をテーマとした全国シンポジウムを開催し、国際交流基金の支援による教材展で中国各大学の教材と日本で出版された教材が展示されていた。そのため、教科書の多くは、素材内容の改善と文法項目の充実を図った。しかし、指導法の配慮は明確な形とならなかった。外国語教育学の理論と方法に関心と実践が不足していた当時の中国では、その研究が少なく、成果も注目されなかった⁹。

③素材統合の段階（2000年以降）

21世紀に入り、高等教育の大衆化と日本語学習者の急増が進み、学習ニーズの総合化と学習形態の多様化が現れてきた。多くの教科書は新版を出したりして対応を進めようとしたが、その対応は素材の新しさや内容の面白さとデザインの工夫を求める傾向が強く、教授法の進化と配慮は少なかった。そんな中で、遼寧少年儿童出版社の『小学日語教材』（2002-2003年）と人民教育出版社の『義務教育課程標準実験教科書 日語』（2002-2004年）の新しい試み¹⁰に続いて、高等教育出版社の『新大学日語』（2002-2003年）は言語活動の種類と関連に注目し読解作文篇と会話聴解篇に分けて構成され、北京大学出版社の『総合日語』（2004-2006年）は新しい文法体系を導入し、会話文の自然さと応用練習の効果を求めようとして工夫されていた。つまり、素材改善だけではなく、新しい理念の導入やシラバスの更新により、素材を異文化コミュニケーション能力の養成へと統合しようとしたものである。

このように、時代の変化と社会の発展に適する

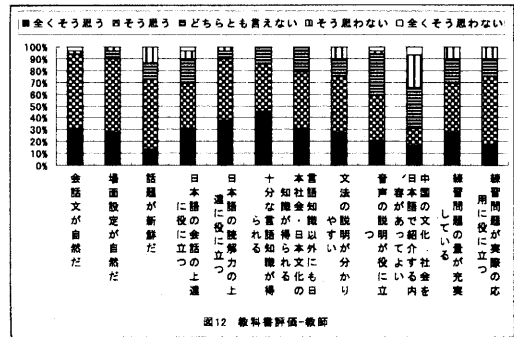
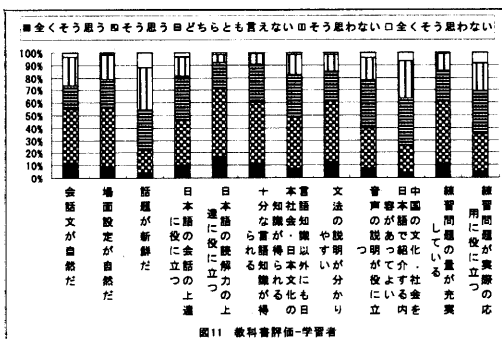
ような新しい日本語教科書が求められるようになり、そのための基礎研究と実践研究は中国の日本語教育の大きな課題となった。

3. 教科書研究の現状

2000 年以來、日本語教科書に関する研究は日本語専攻の大学院ゼミや修士論文の内容として、学問的に重要視されるようになった。北京師範大学の大学院カリキュラムに初めて「日本語教科書分析」という科目が設けられ、最新の外国語教育学理論を学んで中国と日本で出版された日本語教材と英語教材の対照分析が進められていた。また、日本語教材を研究テーマにした修士論文第一号¹¹も西安交通大学応用言語学専攻で出され、ここ 50 年間の中国の日本語教育に使われた主要教科書の内容に関する調査と分析が行われた。

このような教材に関する基礎研究は中国の日本語教育研究で重要な一部分として見なされるようになった。その一例として、筆者が所属する北京日本学研究中心では、中日両国の学者による共同プロジェクトを企画し、大学の日本語専攻で最も学習時間数の多い主幹科目「総合日本語（精読）」を対象に学習研究と教材研究を行い、論文集と教科書コーパスなどの成果物¹²が世に出された。教材に関しては、15 篇の研究成果が論文集に収められているが、その内容は教科書の評価、素材の質と形態、語彙と文法、練習と活動など多方面にわたるものであった。

例えば、教科書の評価で冷麗敏（2006）では下図のように、学生と教師の間に差が大きいことが示された。特に、話題の新鮮さ、場面設定の自然さと会話の自然さ、練習問題の有効性に関しては、教師より学生の評価が厳しいものであった。



会話文について、教科書コーパス¹³による筆者の調査（曹 2006）でも、表 1 のように場面や背景の説明不足という共通の問題が浮かんできたが、会話文で文法を教える意識が根強く残っていることがその一因と考えられよう。

表 1

	BD	BW	DW	SW
前文	○	△	*	○
場面説明	*	*	△	*
場所	△	△	*	△
身分関係	△	○	*	△
性別	○	○	*	*
解説	*	*	*	△
練習	○	△	△	*

○良 △弱 *無

本文の難易度について、篠崎（2006）では表 2 のように各教科書の第 2・3・4 冊の最後の課に掲載された文章の日本語の難易度を、「リーディングチュウ太」を利用して判定した¹⁴。

表 2

教材	第 2 冊	第 3 冊	第 4 冊
SW	★★	★	★★★
BD	★★	★★	★
BW	★	★★	★★★★
DW	★★	★★	★★

この結果から、教科書によって難易度が徐々に上がり、段階的な学習が考えられているもの（BW）と、難易度が変わらないもの（DW）、難易度が逆転しているもの（SW や BD）があることがわかった。各教科書の本文は必ずしも難易度によって選択・配列されていないだろうことがうかがわれる。

文法項目については、筆者（曹 2006）が助詞「に」の出し方と授受表現の「てもらう」の解説を調べたところ、やはり各教科書に差が見られた。

表3

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
助詞「に」の意味用法	存在場所	帰着到達点	成立時点	間接的対象(人間)	受け手	選択決定の対象	変化結果	動作作用の結果	比較評価の基準	比例頻度の基数	目的	名目	原因理由	受動文の動作主体	使役の対象	特定の動作主体	補充説明の補語	並列・添加
SW	1-4	1-7	1-6	1-7	1-16	2-2	1-9	1-18	2-4	1-6	1-16	2-7	3-5	2-9	2-12	3-8		4-1
BD	1-5	1-2	1-9	1-10		1-10	1-5		2-3	3-9	2-3	3-6	4-9			3-1	4-13	
BW	1-11	1-6	1-7	1-7	2-15		1-8			1-7				2-11	2-12		4-11	
DW	1-14		1-16	1-17	1-18				1-23	1-22		2-1			2-13			

注：(数字は出現位置、例えば1-4は第一冊の第四課をさす)

助詞「に」は多くの用法を持つ文法項目であり、その用法を基本的用法→拡張的用法の順序で教えていけば習得効果がいいという主張があるが、実際、教科書コーパスで見れば、表3のように各教科書では分類の細かさとし方の順序が違っていることが観察された。

授受関係を表す「てもらう」は習得しにくい項目といわれるが、意味的には「使役の用法」と「受身の用法」¹⁵に分けて教えると効果的である。しかし、教科書コーパスで調べた結果、表4のように二つの用法に分けて適切に扱われるのが一種の教科書しかなく、他の三種は用例が一方しかない(DB)か、説明と用例が反対になっている(DW、SW)ことが分かった。

表4	DB		BW		DW		SW	
	説明	用例	説明	用例	説明	用例	説明	用例
使役的	○		○	○		○		○
受身的	○	○	○	○	○		○	

各教科書の文法項目について、筆者が日本語能力試験出題基準と対照してみたところ、表5のように教科書間の差が大きばかりではなく、出題基準とのずれも全体的に目立つものであった。

文法項目	SW	BD	BW	DW
1級(50)	23	14	15	11
2級(218)	106	73	73	50
3級(195)	76	89	61	97
4級(268)	123	129	73	89
級外	245	292	201	163
合計	573	597	423	410

表5 ()内は出題基準の項目数

また、教科書の学習語彙について、曹(2006)が動詞、副詞、形容詞に絞って調査したところ、表6のように、BDとBWの教科書間に語数の相違が大きいのに気がついた。

表6

	BD	BW	DW	SW
形容詞	188	103	146	139
動詞	2214	1176	1345	1421
副詞	415	277	343	328

動詞、副詞、形容詞は最もよく使われる語彙として、学習者に提供される語数と頻度によって教科書の学習効果が異なってくるのだが、教科書間に見られるこのような相違はどんな原因によるものなのか、今後さらに細かく検討していきたい。

練習問題と教室活動について、趙華敏(2006)では、教科書コーパスを利用して各教科書の練習問題を調査し、表7のように7つのパターンと二類型に分類して分析が加えられた。

表7

分類	練習パターン		分布(冊)
基礎固め型	1	発音	1>2>3
	2	表記	1-2-3-4
	3	活用	1-2
	4	単語・助詞	1-2-3-4
応用型	5	文法文型 言換え・置換え	1-2-3-4
		文完成・応答・翻訳	
	6	読解	1<2-3<4
7	タスク (ロールプレー・作文)	疎ら	

分類の結果から分かるように、どの教科書も基礎固め型の練習に重点を置いているのだが、それに相応した応用型の練習、特にタスク型の練習がまだ重要視されていず、コミュニケーション能力の養成には配慮が届いていないのが実状であろう。

上述の基礎研究を通して、これまでの大学日本語専攻の教科書の問題が一層明確に示唆された。それは主として次の点にあると考えられる。

- ①話題の新鮮さ
- ②会話の自然さ
- ③場面設定の明確さ
- ④応用練習と教室活動の重視
- ⑤学習項目の選定と配列の適切さ
- ⑥文法項目の出し方と説明の有効性

問題の性質から考えれば、①と②は素材の質、③と④は教授法、⑤と⑥は教育方略の問題だといえるが、いれども今後の教科書作成にとって重要な課題なのである。

4. 新しい教材像とシラバスの研究

上述の基礎研究を踏まえて、われわれは教科書作成の研究を進めてきた。まず、これまでの教科書の問題を解消し新しい時代とニーズに合致するような日本語教科書はどんなものなのか、そのイメージをはっきりと把握するために、「中国の日本語教育のための新しい教材像に関する研究」というプロジェクトを立ち上げ、本センター中日双方のスタッフをはじめ多数の大学の研究者と認識を共有するように努めた。

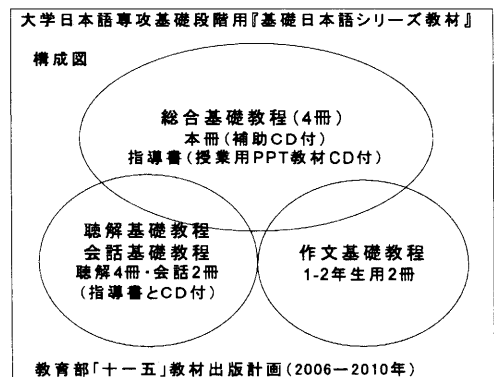
これまでの大学の日本語専攻では、文法中心と教師中心の教授法により「精読（総合日本語）」という授業に比重が置かれ、その教科書では新出単語→本文→文法解釈→練習という流れを貫き、「会話」や「聴解」などの科目との整合性が配慮されなかった。そのため、教師の教授経験や能力によって知識の学習と技能の訓練には一定的な効果を果たしていたが、しかし、近年来、中日の経済貿易関係がますます発展してきたことに伴い、大学の日本語学科が次々と新設され学生も急増したので、学習動機や学習スタイルを変えつつある学生に対し、新設学科の経験の少ない若手教師でも対応できるような教材が求められるようになったが、理想的な教科書はない。そこで、当今の学習者と若手教師のニーズに対応し、自律学習やコミュニケーションの能力などを含む総

合的学習と応用力の養成に役立つような教科書を開発しなければならぬと認識し、次のような教材開発の目標が立てられた。

- 科目間の連携と効果的学習を図り、総合的な日本語能力の養成をめざすシリーズ教材
- 現実に即して真正性(authenticity)・規範性・実用性をもつ学習素材と多様性のある視点を提供する教材
- トピック先行のタスク型学習モデルの導入によって文法中心と教師中心の教材体系を改革し、自主的で協働的・創意的な学習が可能な教材
- マルチメディアによる副教材、講義用 PPT 付の指導要領書を提供し、学習の立体化と教育の均質化を可能にする教材

この目標に基づいて、われわれは新しい教科書の中日共同作成プロジェクトを企画し、教育部「十一五」教材出版計画¹⁶⁾に申請したところ、専門家の審査を通して採用された。

同出版計画は次のように、12冊の主教材と多数の指導書とマルチメディア CD 副教材からなるシリーズ教科書を作成するものであるが、2011年の完成を目指して現在は、シラバスの研究を経て各冊の作成に入っているところである。



ここに、同シラバスの研究をめぐって論述を続けるが、上述の目標を実現させるために、われわれはシラバスの改革に努めてきた。

これまでの大学日本語専攻用の教科書は、ほとんど文法シラバスによるものであった。しかし、国際化時代の到来や WTO 加入と人間重視の社会作りというここ十年の中国社会の新しい変化に応じ、初中等教育での外国語教育や大学の英語教育では理念・スタンダード・教材・教授法において著しい進화가

見られ、総合運用能力および学習者・学習過程・学習ストラテジーが重視されるようになった。一方、文法シラバスを中心に作られた教科書を使っている中国の日本語教育では、前述のように教科書に関する教師と学生の評価が大きく分かれており、学習した文法が運用につまずいていたり¹⁷、文法知識を教科書から大量に得ていても実際にコミュニケーション能力が欠如している¹⁸と指摘されている。問題の根本は主に文法解説を中心とする教授内容と教師の講義を中心とする教授形態の2点に集中していると考えられる。

そこで、われわれは新しい教科書のシラバス作成にあたり、教科書の教授内容と学習形態を改革しようと、次のような方針を定めた。

○使用場면을重視したトピック先行の総合シラバスを導入し、大学生の知的水準に合う学習内容と能力重視のタスク型学習形態を提示する。

○トピックとタスクに見合った教育文法を開発し、文法運用能力の養成を目標に機能重視の文法配列と学習者向けの文法内容を提示する。

まず、トピックについて、大学生の知的水準を出発点にし、これまでの学習経験と学習能力（母語と英語）を相乗的に生かし、社会のニーズと学習者のニーズ（多文化交流と人間的成長）に応じるように、教科書のトピック内容（20トピックで60課構成）の考案と工夫をした。たとえば、知的でいままでも少し違った話題や議論にしやすい話題、また、ごく普通の物事を普通と違った角度からどう見直すか、

普段と違った物事をどう見るべきか、いままで知らない情報や典型的な日本語表現などに、特に留意をして素材を集めたのである。

そして、タスクの設定は現実性と到達点を大切に、場面性・実用性・達成感を重んじて、最新の日本語能力試験（JLPT）の出題傾向とヨーロッパ共通参照枠（CEFR）を参考にして、総合的段階的目標と多様な学習活動の導入を提案した。たとえば、リストアップ、配列、分類、比較、情報交換、問題解決、ディスカッション、ディベート、インタビュー、創作（ミニ広告、レポート、小論文、記事、壁新聞、パンフレット）等々の活動を、ペア、グループ、アクティビティー、LTD、ワークショップなどの形式で展開することである。

また、教科書に自主型・協働型・創作型の学習活動を導入するだけではなく、タスクチェーンでそれを連結し、観察・発見・産出・評価・定着という学習プロセスに位置づけることによって、学習ストラテジーの促進と総合的運用能力の向上を実現させようと、総合シラバスで提案している。たとえば、表8の総合シラバスのサンプル（第1冊と第3冊各一課ずつの一部）に見られるように、トピックや学習目標は具体的な学習活動に支えられていて、その学習活動は観察・発見・産出・評価・定着のタスクチェーンで組み込まれているのである。

表8

トピック	目標	ステップ	学習活動	タスク活動	文型	機能	文法語彙	練習
ネットミーティング	ネットで日本の大学生と知り合う	自己紹介相手に聞く 家族紹介	観察：事前・素材 (読・聞) 発見：意味・形式(文型) 産出：形式・話／書 まとめ：評価・定着	名刺を作る メールで会員登録と自己紹介 名前の漢字を説明する クラスの名簿を作る ネットで個人情報交換する	(私は)李です 出身は北京です 趣味は読書と音楽です お名前は？ 北京の名物は何ですか 父は会社員です 母は会社員ではありません	自分について話す 相手について尋ねる 他人について話す 名前、所屬、出身地、名物、趣味を伝える	(Nは)Nです(ではありません)か>は>>>と 初めまして・どうぞよろしくはい/いいえ ～さん、お(ご)>わたし 出身・趣味>名前・名物>学部	代入<否定 変換<応答 結合<談話
風景描写	写真つきの観光パンフレットを作ろう	八景の調査 八景の発表 八景の作成	観察：事前・素材 (読・聞) 発見：意味・形式(文型) 産出：形式・話／書 まとめ：評価・定着	八景比較表整理 地元観光案内作成 観光ガイド実現	艶を競う 赤く彩られた雲 屹然と立つ城 雪に覆われた山野 人を別世界へといざなう 賞賛を惜しまない光景	表現を定型化する 風景を描写する 擬人法を使う 背景説明 変化叙述 観光を誘致する表現 比喩表現を使う 凝縮表現を使う	Nからなる Nをもととする Nを背景にわけではないが ずにはおかない 比喩物にならない ことだろう 文章構成 情報連結 自動詞と他動詞表現	

このように、新しい教科書の総合シラバスはトピックとタスクの作成と工夫において、新しい実践が凝らされたものであるが、その作業を通してわれわれが常に直面していた課題は文法シラバスとの関係であった。

前述のように、中国の日本語教材はこれまでほとんど文法シラバスを中心に作られていたため、教師も学習者も教科書の文法解説を学習内容として頼りにしてきた。そのため、トピック先行のタスク型学習モデルを導入する際に、文法に関する教師と学習者の依頼心理¹⁹を考慮しなければならない。そこで、われわれはトピックとタスクに見合った文法シラバスの開発を基本方針として、次の目標で中国学習者向けの教育文法の再構築を目指しているところである。

①学力別に学習活動を展開しやすいように、トピックと文法の配列を調合する。

言葉や文法の習得には一定の順序があることがすでに先行研究で証明されていたが、トピック先行のタスク型学習では、習得順序や習得容易度に関する研究成果を参考に、トピックと文法の配列を調合し、学力別に学習活動を展開しやすいようにしなければならない。

②コミュニケーション活動を基盤に、能力獲得と方略増進のための文法学習活動を提示する。

文法学習のニーズと文法能力の習得目標を結びつけて、異文化コミュニケーション活動を基盤に機能中心の文法学習を導入するとともに、発見・模倣・モニター・修正の自律的学習活動を設計することによって、学習者の総合的運用能力と語彙・文法的学習ストラテジーを促進する。

③受容と産出の言語活動に即して学習ステップを設定し、小分けに持続的な文法学習を設計する。

文法の学習負担を分散し持続的な学習効果を保つために、受容（読む・聞く）から産出（話す・書く）へのステップで言語活動別に学習項目の振り分け・リンクとまとめを行う。重要項目は学力別に小分けに用法を提示し、段階的に整理とまとめを加えて、持続的な学習活動を提示する。

④学習者の既得能力や母語知識を生かし、得になる文法解説と主体的な学習活動を提示する。

学習者の既得能力や母語知識を最大限に生かして、学習項目を加減し重み付けをして、学習者に理解されやすいように簡潔で談話と運用を視野に入れた文

法解説を提示するとともに、主体的な学習と気づきを促すように言語対照やルール探索などの学習活動を提示する。

⑤学習者と教師に受け入れやすい新しい文法体系を導入し、習得に役立つ教育文法を再構築する。

日本語教育文法²⁰の新しい体系と用語を導入するとともに、中国の学習者と教師に受け入れやすいように、従来の用語を一部継承し従来体系や用語との対照を明示するようにする。また、文法の意味機能ばかりではなく、その表現形式の形作りにも焦点をあてるように、効果的な学習を目指して習得に役立つような教育文法を再構築する。

この目標に向けて、われわれはまず教科書コーパスをもとに 1400 ほどの文法項目を網羅したデータベースを構築した。そのデータベースには主要教科書での配列、日本語能力試験（JLPT）や大学日本語専攻四級試験の出題基準、習得ステップ（受容と産出）、文体（話し言葉よりと書き言葉より）、学習重要度（重み付け）、適応学力（初級・中級・上級）などの情報を標示したが、それを参考にして、前述の基本方針と目標に基づいて、異文化コミュニケーション能力の向上につながるように、新しい教科書に配置する文法シラバス案と文法解説のモデルを作成した。この文法シラバスと解説モデルは今後、教科書作成の過程においてさらにトピックとの調合が進むにつれて、内容の修正とモデルの進化が予想されている。

5. まとめ

外国語教育では一般的に、目標言語の環境が弱ければ弱いほど教科書が提供する学習資材が重要になるのであるが、中国の日本語教育では、学習者分布が広く教師の教授レベルが均質的でないこともあり、教科書の指導的役割が大きいと思われる。

本稿では筆者が関わる一連の研究と実践を踏まえて中国の日本語教材作成の現状と課題を論述したが、これをもって教科書作成と研究に関心を持っている中日両国の日本語教育関係者と意見交換をし、共通の関心点や課題を交流することができれば、幸甚である。

注

1. 本稿はお茶の水女子大学日本言語文化学会第 3 回講演会で話した内容をもとに書き下ろしたものである。

主な観点と内容の一部は篠崎摂子氏（国際交流基金日本語国際センター）・林洪氏（北京師範大学）、井上優氏（国立国語研究所）との共同研究によるものであるが、論述の誤りはすべて筆者の責任に帰すものである。なお、本稿に使用した図表はお茶の水女子大学日本語文化学会で2007年5月18日に行われた講演会にて使用されたものである。

2. 非母語話者教師が多い
3. 徐一平・篠崎摂子（2005）
4. 汪向荣（1991）
5. 徐敏民（1996）
6. 『新編日語』（上海外語教育出版社 1993-1995年）、『新編基礎日語』（上海訳文出版社 1994-1995年）、『基礎日語教程』（外語教学与研究出版社 1998-2001年）、『大学日語』（高等教育出版社 1991-1992年）など
7. IUCのINTEGRATED SPOKEN JAPANESE（凡人社1971年）、吉田弥寿夫他『あたらしい日本語』（学習研究社1973年）、東京外国語大学附属日本語学校の『日本語』（1980年）、文化庁の『生活日本語』（1983年）など
8. 新屋映子・姫野伴子・守屋三千代（1999）など
9. 同シンポジウムでは国際交流基金の支援で岡崎敏雄著『日本語教育の教材』（アルク）が配布されたが、深く読まれるまでは長い時間が経った。
10. 篠崎摂子・飯野令子・曾麗雲（2004）、伊月知子（2005）
11. 張文麗（2000）
12. 曹大峰主編（2006）
13. 大学日本語専攻基礎段階用の主要教科書四種（1993-2002年）を全文収録した電子コーパス
14. 表中のレベル判定は「リーディングチュウ太」によるものである。レベルの判定は文章中の日本語能力試験3・4級の単語が全体に占める割合により、80%以上「★とてもやさしい」、70%以上 80%未満「★★やさしい」、60%以上 70%未満「★★★ふつう」、50%以上 60%未満「★★★★すこし難しい」、50%未満「★★★★★難しい」となっている。
15. たとえば、床屋で顔をそってもら（使役的）、ご褒美に辞書を買ってもらった（受身的）など
16. 中国第11回五ヵ年建設発展計画（2006-2011）に採用された教材出版プロジェクトで、日本語教材は30件ほど選定された。
17. 蔡全勝（2006）
18. 楊峻（2008）
19. 楊峻（2008）
20. 学校文法に対して、最近日本国内の日本語教育で広く使われている文法体系。益岡隆志・田窪行則（1989）、庵功雄・高梨育子・中西久美子・山田敏弘（2000）、彭広

陸総主編（2004）など。

参考文献

- 国際交流基金（2007）『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2006年』凡人社
- 徐一平・篠崎摂子（2005）『各国の日本語教育 中国』『新版日本語教育事典』大修館書店
- 汪向荣（1991）『清国お雇い日本人』朝日新聞社
- 徐敏民（1996）『戦前中国における日本語教育』エムティ出版
- 岡崎敏雄（1991）『日本語教育の教材』アルク
- 新屋映子・姫野伴子・守屋三千代（1999）『日本語教科書の落とし穴』アルク
- 張文麗（2000）『西安交通大学硕士学位论文』
- 篠崎摂子・飯野令子・曾麗雲（2004）『中国遼寧省の小学生用日本語教材制作について－海外での日本語教材制作のあり方－』日本語国際センター紀要第14号
- 伊月知子（2005）『中国における日本語教育－“全日制義務教育日語課程標準(実験稿)”の特徴と教科書に見られる新しい試み－』今治明德短期大学研究紀要第29集
- 篠崎摂子（2006）『精読教材の本文について』《日語教学与教材创新研究》高等教育出版社
- 趙華敏（2006）『基礎段階用日本語教科書における練習問題について』《日語教学与教材创新研究》高等教育出版社
- 蔡全勝（2006）『中国の日本語教育における諸問題についての考察』《日語教学与教材创新研究》高等教育出版社
- 楊峻（2008）『グループワークの経験が中国人学習者の言語学習観に及ぼす影響－日本語専攻主幹科目の受講生を対象とする実証的研究－』『世界の日本語教育』第18号
- 曹大峰・林洪・篠崎摂子（2007）『学習者の主体性を重んじた日本語教科書をめざして－新しい教材シラバス作成の実践例－』『二十一世紀における北東アジアの日本研究』国際シンポジウム予稿集』
- 徐一平（1997）『中国的日語研究与日語教育』《日語学习与研究》4
- 曹大峰主編（2006）『日語教学与教材创新研究』高等教育出版社
- 冷丽敏（2006）『关于“综合日語(精读)”的认识调查－学生与教师之比较－』《日語教学与教材创新研究》高等教育出版社
- 曹大峰（2006）『日語精读课教材语料库的构建与应用研究』《日語教学与教材创新研究》高等教育出版社

そう たいほう／北京日本学研究中心

cdfeng2005@163.com

Complication and Research of Japanese Textbooks in China

— History, status and research project —

CAO Dafeng

Abstract

【Keywords】 Japanese Teaching in China, Japanese textbooks, Syllabus research, Status and project

This article gives an overview on the history of Complication of Japanese textbooks in China. And at the same time it take several project which by the writer for example, in order to elaborates the status and research result of Japanese textbooks in China, and introduces the research project of dialogue and grammar syllabus on new textbooks which they are compiling.

(Beijing Center for Japanese Studies)